
真選組の長い一日。

響
響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真選組の長い一日。

【Nコード】

N4645B

【作者名】

響

【あらすじ】

春のある日をのんびりと過ごす真選組の面々。このあと事件が起ころうとは、まだ誰も知るよしもなかった…。

はじめはじまり（前書き）

「銀魂」のファンフィクションです。

おもしろおかしい銀魂の世界を表現できていたらこれ幸い。
のほほんと読んでみてください。

はじまりはじまり

暖かな日差し。鶯は歌い、春の訪れを喜んでいる。
変質者の多いこの季節には珍しく、今日は事件が一つもない。したがって、いつも多忙な真選組には、思いがけない休日となった。

「いい天気だ…」

稽古の手を休め、真選組副長、土方十四郎はつぶやいた。
屯所の中庭には小さな梅の木があり、稽古場からの眺めはなかなかのものだ。鬼の副長と呼ばれる彼も、この景色には目を細めずにはられない。
いや、うつつを抜かしてはならない。土方は自分に言い聞かせ、稽古場の戸を閉めきった。

それとは対照的な男が一人。

「ふう…ちよいと休憩でもしやしょうかねエ」

真選組一番隊隊長、沖田総悟は、畳の上に寝転がった。もっとも、特になにもしていなかったのだが。
愛用のふざけたアイマスクをつけ、いつもの体制で眠り始める。その姿を見る限り、真選組髓一の剣の使い手とは思えない。

真選組局長、近藤勲は、自室で写真を眺めていた。

「今回は良く撮れたぞ…」

その写真を丁寧に箱に入れ、掛け軸の裏の穴の中に収めた。
部屋の外から隊士に呼ばれ、足早に部屋から出ていく。彼の人の良さがうかがえる。

彼らは、まだ気づいていなかった。

この穏やかな今日の日が、慌ただしく長い一日になるうとは…。

其の壱 犯人とかすぐに決めつけるのは良くない

「あつぢい!!」

土方は稽古場から台所に出た。閉めきつたせいで、熱がこもり夏のような暑さだ。

大急ぎで冷蔵庫に向かう。彼の大好物が入っている。稽古終りの一杯は格別だ。

そう、マヨネー…

「…はあ!？」

彼の楽しみ、マヨネーズは跡形もなかった。

キレながら足下を見ると、マヨネーズがぶちまけてある。それは廊下を通り、中庭まで続いていた。

中庭にはマヨネーズで土方に対するメッセージが書いてあった。

「死ね!土方コノヤロー!!」

近くには無惨なマヨネーズのからと、こう書かれた一枚のカード。

「マヨネーズはいただいた! by流ぱん(るぱん)八世」

土方は犯人を瞬時に察知した。むしろ、一人しかいないっての!

「総悟オオオオ!!!出てこいやゴルアアア!!!」

土方はキレまくっていた。いや、ほんと刀抜きそうな勢いで。

「なんの用ですかイ土方さん。せっかく寝てたのにイ」沖田が目を擦りながら歩いてきた。

「てめえなあ!!!あ?」

土方が驚いたのも無理ない。沖田の顔には、ものっそい落書きがし

てあつた。ヒゲとかまぶたの上に目とか。

「お前…それなんだよ」

「ん？なんのことですかイ」

おもむろに窓を見ると、落書きされたアホくさい顔が写っている。

「ああ！？なんでイこりやあー！」

焦る沖田の懐ふところからポロリとなにかが落ちた。

「アイマスクはいただいた！　by流ばん八世」

「あ！そういえばありやせんぜイ！！」

「や、気づけっ！！！！」

流ばん八世は沖田ではなかった。なら一体誰だこらあ！

とりあえず二人は信頼する近藤に相談することにした。

其の式 ストーカーを愛情とみるか犯罪とみるかが問題だ

「近藤さん！！」

大きな音を立てて襖が開いた。近藤は驚いて飲んでいた茶をぶちまけた。

「ぶおっほうトシに総悟！なんだどうした？あっちよつとまって茶が変な所にいぶふっ！」

近藤が落ち着くのをまって、土方と沖田は自分達に起こったことを話し出した。

「流ばん八世？なんだそりや。あ、俺じゃないからねっ！」

「なあに言ってんだ近藤さん。別にあんたを疑っちゃいねーよ」

「近藤さんは信じてまさア」

近藤はふうと安堵の溜め息をついた。本当に疑われていると思ったのかこいつは。

「そんな族^{やから}のことより、見ろっ！今度はお妙さん、綺麗に撮れたんだ！！」

「（また姐さんの隠し撮りかよ…）」

土方と沖田はあきれて顔を見あわせた。

近藤はすなっくスマイルで働くお妙に入れ込んでいる。加えれば、ストーカーという犯罪に手を染めている。

ひたすら愛を貫くのはいいが、相手の気持ちも考えてほしいものだ。

掛け軸の裏の穴に手を突っ込んで、お馴染の箱を取り出す。

「開けっお妙さんBOX！」

「勘弁して下さい…」

やれやれといった感じで箱の中を覗きこむ。

たくさんの写真。だが近藤は写真を手にぶるぶる震えている。

「どうした近藤さん」

一枚手に取り見てみるが、そこにはお妙など写っていないかった。

「なんだあの猫耳のくせにひとつかけらも萌えねえ女はアアア
！！」

近藤が怒りを抑えきれずに叫んだ。それもそのはず、お妙の写真はすべてスナックお登勢で働くキャサリンのものに代えられていたのだ！

しかも水着やらメイド服やら…まさに兵器。

「い…嫌なもの見ちまったイ」

「やべえ目が腐る…」

「おい俺なんてなんか出てきそうだよ！生んじやうよ俺！」
瀕死の三人に、箱の蓋に貼られたカードが目にはいった。

「隠し撮り写真はいただいた！ by流ぱん八世」

「『流ぱんがなんぼのもんじゃい！！！！』」

三人は犯人を半殺しにすることに決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645b/>

真選組の長い一日。

2011年1月8日03時14分発行